４　『松蔭日記』は、柳沢保明（後の吉保）の側室正親町が夫の一代を綴った物語である。元禄十三年（一七〇〇）、保明は病を患うが、様々な治療によって回復する。「御所」（徳川五代将軍綱吉）は保明に病後の気分転換をすすめた。以上を踏まえ、次の文章を読み、後の問いに答えよ。なお、設問にあたり一部表記を改めた部分がある。　　〈愛知県立大〉二〇二二年度出題

　葉月の末つかた、おまへの萩も色づきつつ、①秋の野の人まつ虫の声も、げに、われかと行きてとはましき頃なるに、そそのかされて、駒込といふ所に山里持ちたまへる、おぼし出て、おはしたり。みちのほど、あやしうⒶむつかしげなる、小路のさまも、やうかはりておぼす。やや入らせ給ふに、Ⓑほどよりは、里ばなれたる心ちして、木だち物ふり、何ならぬ草の葉末も、秋風ひまなく打ちなびきて、あはれふかき山里なり。

　月頃、御いとまおはせず、遠き所には、大かた、さしのぞかせ給ふ事だになければ、庭なども、Ⓒをさをさつくろはせ給はず。気疎くあれまさりて、野辺の松虫、ところえがほなり。おはします屋どもは、大かたよそほしう、もとよりたておかせ給へれば、けふ②わたらせおはしますとて、あづかりなど、かきはらひ、しつらひて、さすがに③物きよくなしつ。御所よりも、御くだもの、さかななど給はす。

　日ひと日、御物などまゐり、つくづくと、ながめ給ふ。④ふるさとなどいふも、かうこそはありけれ。かうしづかなる所に、おもふ事なくてながめなんこそ、いかばかりをかしさもそふわざならめ、など、おぼすべし。人めして、露すこしはらはⓍせて、おりさせ給ふ。萩がえのおのれ、おひ風におきかへり、猶、露ふかくそよぐ。

　　分け行けば花も末野におく露のみだれて袖にこぼす萩原

くれかかるまでながめて、また御ひとりごとに、

　　山里の秋のの色なれやのきばの雲も霧のまよひも

もろともに、ながめ興ぜん人もあらまほしけれ、と口をしければ、つきせず、かへらせ給ふ。廿二日ばかりの月おそき空の心もとなきに、さすがに道のほどは露しげくて、中々Ⓓえんなる夕やみなり。されど、御心地などは、なぐさませ給ひⓎぬ。

（『松蔭日記』より）

（注）

　山里…別荘がある山里（六義園）のこと。

　日ひと日…日がな一日。

　ふるさと…古歌や古物語にいうところの「古里」。

問１　傍線部Ⓐ、Ⓑ、Ⓒ、Ⓓの本文に即した意味を記せ。

問２　傍線部Ⓧ、Ⓨを例にならって文法的に説明せよ。

　（例：カ行四段動詞「行く」連体形。ク活用形容詞「無し」未然形。推量の助動詞「べし」終止形。）

◎問３　傍線部①は『古今集』の和歌「秋の野に人まつ虫の声すなりわれかとゆきていざとぶらはむ」を踏まえている。その点に注意して、語句を補って現代語訳せよ。

問４　傍線部②の敬語表現は誰から誰への敬意を示したものか、記せ。

問５　傍線部③の主語を本文中より抜き出せ。

問６　傍線部④とあるが、ここでいう「ふるさと」とはどのような庭の様子か、説明せよ。

◎問７　一日山里で過ごした保明の心情はどのように変化していったか、本文に即して百字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ⓐ＝気味が悪そうな　　Ⓑ＝距離

　　　Ⓒ＝ほとんど　　　　　Ⓓ＝しっとりと風情がある

問２　Ⓧ＝使役の助動詞「す」連用形　　Ⓨ＝完了の助動詞「ぬ」終止形

問３　秋の野にＡ人を待っているようなまつ虫の声がＢ聞こえるが、なるほど、Ｃ自分を待っているのか。

Ａ＝４〔「待つ」と「まつ虫」の掛詞の説明がなければ０。〕

Ｂ＝２〔「聞こえる」という要素がなければ０。〕

Ｃ＝４〔「自分を待っている」などの言葉が補えていなければ０。〕

問４　作者から保明に対する敬意

問５　あづかり（など）

問６　Ａ久しぶりに訪れるとしばらく訪れないうちにＢ荒れ果ててしまっていたが、（それでも）Ｃ趣のある、Ｄ昔なじみの庭。

Ａ＝３〔保明にとって初めて訪れた庭でないということが書かれていれば可。〕

Ｂ＝２〔庭が荒れ果てている様子が書かれていれば可。〕

Ｃ＝２〔趣のある庭であることが書かれていれば可。〕

Ｄ＝３〔「ふるさと」を「なじみの土地」で解釈してあれば可。〕

問７　Ａ人けがない山里や荒れ果てた庭に趣を感じ、Ｂ何も思わずこの景色を眺めたいと思った。Ｃ夕方にはともに眺め興じる人がほしいと思いつつ名残惜しいが帰った。夕闇のなか不安を抱きながら帰るも、Ｄ気持ちは慰んでいた。（98字）

Ａ＝３〔「山里や庭に趣を感じる」という内容が必要。〕

Ｂ＝２〔「憂いなく過ごす」という内容が必要。〕

Ｃ＝２〔「一緒にいる人がいなくて寂しい」という内容が必要。〕

Ｄ＝３〔心が晴れていた」という内容が必要。〕

【現代語訳】

旧暦八月の末ごろ、眼前の萩も色づきつつ、問３秋の野に人を待っているようなまつ虫の声が聞こえるが、なるほど、自分を待っているのかと行って問いたい頃であるので、（その風情に）せき立てられて、駒込という所に（別荘がある）山里を持っていらっしゃったと、思い出しなさって、（そこに）いらっしゃった。（途中の）道の様子は、見苦しく問１Ⓐ気味が悪そうなもので、小道の様子も、普通とは様子が違うとお思いになる。ややお進みになると、（実際の）問１Ⓑ距離よりは、人里離れた気持ちがして、木だちはどことなく古びており、何ということはない草の葉の先端も、秋風にみな打ちなびいて、趣深い山里である。

　何か月もの間、（職務に忙しくて）訪れなさる暇もなく、遠い所には、まったく、お立ち寄りになることさえないので、庭なども、問１Ⓒほとんど修繕させなさっていない。人けがなく荒れ果てて、野原のまつ虫は、居場所を得て得意顔である。いらっしゃったお屋敷たちは、おおかた立派でいかめしく、その建ったままになさっていたので、今日（保明様が）いらっしゃるということで、留守番などが、（不要な物を）取り払い、整え設けて、そうはいってもやはり物などを整えた。綱吉様からも、木の実や草の実、酒の肴などをくださる。

　日がな一日、たまわりものなどを召し上がり、つくづくと、（景色を）眺めなさる。古歌や古物語にいうところの「古里」（昔なじみの場所）というのも、こういうものであった。このように静かな所に、物思いすることなくして眺めることは、どれほど趣が増すふるまいであろうか、などと、お思いになることだろう。人を呼んで、露を少し払わせて、（庭に）お降りになる。萩の枝自身が、追い風にひるがえり、やはり、露に濡れてそよぐ。

　分け行くと花も末の頃の野に降りる露が（そのままおかれ）、乱れて袖にこぼれる萩の野原である。

日が暮れかかるまで眺めて、またお独り言に、

山里の秋の夕方の色であろうか。軒の端の雲も、霧の（ような私の）迷いも。

一緒に、眺めて鑑賞する人もいてほしいものだ、と残念なので、眺め尽きることなく、お帰りになる。二十二日ほどの月が出てくるのが遅い空が（暗くて）不安で落ち着かないが、そうはいってもやはり道の付近は露がたくさん降りて、かえって問１Ⓓしっとりと風情がある夕闇である。そうであるけれども、お気持ちなどは、お慰みになった。